

水戸ブレインハートセンター Director Note 院長ノート

病院のホームページに掲載している畑山院長のエッセイです。
月に1回くらい、脳外科診療や日常生活で感じている想いを軽妙なタッチで書き連ねています。
ご興味ありましたらQRコードから過去の内容もご覧下さい。



脳神経外科医
畑山 徹
(はたやま とおる)

1963年生まれ
青森で育ち、弘前大学を1988年に卒業
日立市の病院で河野拓司理事長に手術の
手ほどきを受け、東北各地で腕を磨いた
のち、2013年から当院に勤務
アメリカで三叉神経痛と顔面痙攣の治療
を学び、国内でも有数の実績を持つ
趣味は我流のピアノ
たまにライブハウスで演奏

vol. 56



はた流コミュ術

第6条「わかる言葉を使う」

今ではもう文字も手で書くよりキーボードで打つ方が楽になりました。
漢字への変換も、AIが進歩してむしろ自分で書くより間違いが減っています。
でもたまに、笑っちゃう誤変換に出くわすこともあります。
たとえば「変換ミスコンテスト」の受賞作を見ると
「馬喰い家内が象サイズになった（うまくいかない画像サイズになった）」
「何か父さん臭いことがある（何かと胡散臭いことがある）」
「肋骨食って下さい（六個作って下さい）」
どれもひらがなと同じ文章になりますからちょっとびっくりです。

ということは、話している言葉もひらがなで読んだ時みたいに別な意味に聞き取られちゃうかもしれません。
「えんしょうのふい」
当然「炎症の部位」のつもりで言ってます。
でも、海の仕事の人にはひょっとして「延焼のブイ」と聞こえているかも。

それでなくとも、病院では普段使わない言葉が説明にあふれています
よご（予後）、じゅうとく（重篤）、せんもう（譫妄）、かんかい（寛解）…
漢字で読むのと違って、耳で聞こえる音は、知らない言葉だと意味を推測できません。
一生懸命話していても、わからない言葉が混じると
相手は戸惑って不安になります。
はた流コミュ術第6条は、「わかる言葉を使う」です。
使い慣れた言葉ではなく、相手が聞き慣れた言葉を選ぶことで、きっと説明の効率も高められると思います。

次回は第7条「はっきりしゃべる」です。



院長ノートはこちらから→

<https://mito-bhc.com/blog/blog.html>

